

第4回電気絶縁材料シンポジウム開催にあたって

絶縁材料常置専門委員会委員長 犬石 嘉雄

米国のポコノ会議（Conference on Electrical Insulation）のようなふんい気の絶縁関係の会議をわが国でももちたいという絶縁材料関係の専門家の要望で、電気学会内に電気絶縁材料シンポジウムが誕生したのは昭和43年秋であった。この実現は多数の方々のご協力によってはじめて可能になったわけであるが、とくに電気学会電気材料技術委員会と放電・絶縁材料コロナ劣化・絶縁材料トリーイング・絶縁材料耐熱性試験法・誘電材料導電特性各専門委員会の委員長はじめ委員諸氏の名をあげておきたい。以来、電気材料技術委員会内に設けられた絶縁材料シンポジウム実行委員会が主体となって本シンポジウムが3回にわたって開催され、参加者、応募講演の量・質ともに年々向上し、電気学会内での絶縁材料関係者が一堂に会して発表・討論を行なう場として、一応確立された地位をもつにいたった。これは、ひとえに関係委員会、実行委員会、学会事務局、参加者の熱意と努力のたまものである。

第4回の本年からは、新設の絶縁材料常置専門委員会が引きついで本シンポジウムを開催することとなった。本年も昨年の Sharbaugh 博士につづいて、米国 Westinghouse 社の Dakin 博士を招待し特別講演をお願いすることになった。これは、関係業界各社のご援助によって可能になったことを記して謝意を表したい。本年は特別テーマとして加速試験、合成絶縁紙の2件をとり上げたが、一般講演と合わせると約53件の講演申し込みがあった。2日間の日程に Parallel Session なしに収まるのは約30件であり、やむを得ず半数近くの優れた論文を8月30日（東京）、10月1日（秋田）、11月8日（名古屋）の絶縁材料研究会の方へまわさざるを得なくなった。応募された方々におわび申し上げるとともにご了承をお願い

いしたい。この点に関連して、来年からは論文選定についても査読の方法に改善を加え、さらに公平をはかりたいと考えている。また、Parallel Session、日程などにも検討を加え、応募論文の収容力をふやすことと十分な討論時間をもつことという二律背反を解決する Optimum Condition を確立したいと思っている。

米国のポコノ会議と比較して感じられる一つの点は、化学方面の研究者の参加が比較的少ないことである。私は、絶縁の問題は電気・化学・物理の3分野の専門家が強い相互作用を起すところに将来の発展の原動力があると思っているので、高分子・化学関係の学協会のご協力を得たい。

最後に、本シンポジウムを真に実りのあるものに育て上げるのは、参加者各位の熱意とご支援によるので、熱心な討論と本委員会に対するきたんないご意見をお願いしたい。第4回シンポジウムの実現に努力された絶縁材料常置専門委員会の委員氏名は下記のとおりである。(敬称略)

〔幹事〕 家田正之、矢作吉之助 〔委員〕 井関 昇、岡本英夫、
加子泰彦、金指元憲、川井栄一、河野照哉、堺 孝夫、内藤克彦、
能登文敏、原 仁吾、堀井憲爾、松浦虔士、吉岡 浩

〔幹事補〕 伊東宇一